

七十俵五人扶持

大津 隆文

過日作家の浅田次郎氏の講演を聞く機会があった。タイトルは「江戸時代に学ぶ」、大変分かりやすく興味深い内容であった。とくに二つの数字が印象に残った。

一つは江戸の土地利用状況で、大名屋敷、町人地域、寺社の占める割合が、七対二対一であったと教えられた。圧倒的に大名屋敷が広がったのに驚いた。

これが遷都、新政府発足を大いに助けたという。維新で江戸にいた必要がなくなった大名の屋敷跡が大いに活用できたのである。新しい官庁街や公共施設（上野公園）、練兵場等の整備がスムーズに行なわれた。また大名屋敷には緑が多かったお蔭で東京には楠をはじめ緑が多い。

もう一つ印象に残ったのは「七十俵五人扶持」。これは御徒組のメンバーである徒と呼ばれる下級武士の俸給（元公務員の私には薄かった月給袋より有難みを感じられる）。七十俵を切米、五人扶持を扶持米と呼び、切米は年三回（春、夏、暮）、扶持米は一人一日五合の計算で毎月支給された。

俵という単位についてみると、一俵は四斗（四〇〇合）で、一合は一五〇グラムなので六〇キロになる。昔は一俵を担ぐと力持ちと言われたものだ。また、介護されるためには体重を六〇キロ以下にしておいた方がいい、と聞いたのも成る程だ。

一日五合というのは多いように思うが、氏によれば明治以降日本の軍隊では一人一日六合が基準だったとのこと。一合を炊いたご飯は茶碗二杯分というから、昔の人はよく食べたものだ。まさに主食だ。

ただし米が主食といっても、皆が皆米のご飯を食べられた訳ではない。白米のご飯は減多に口にできなかった人も多かった。その貴重な米の存在感が近年薄れているのは寂しい。これでいいのだろうか。もっとご飯を食べようと氏も言っていた。

米が長年に亘って日本の社会、文化の基盤であったのは疑いがない。旅に出て車窓から田んぼを眺めていると、私達の先祖はこの田んぼで何十年、何百年営々と働いてきたのだ、これが日本なのだという感慨を覚える。